譬え話としての「ヨブ記」

前　田　禮　子

まえがき

ヨブ記が書かれた頃(c. B. C. 500)からすでに、ヨブの神とは何かについて論議があったといわれている。ヨブの試練の不条理さについては今なお解釈し難く、そのために歴史の推移の中で、さまざまな時代の今日的な解釈ができるだろう。当稿では、そのようなヨブの神を正義の神として解釈することにした。

対比として、もっとも厳しくヨブの神を批判したユング (C. G. Jung) の『ヨブへの答え』(— Answer to Job —) に反論して、ヨブの神の正当性を論じることにした。ユングは、旧約聖書からは解決がつかないので、中世ユダヤ教神秘思想から考察し、メシア思想によってヨブの神を未来の救済へ繋げようとしている。それでもユングは、黙示録でふたたびキリスト教の神に躓いて、ついにヨブの試練にたいして解決を見出しえない。当稿の目的はユングを論ずることではなく、ヨブ記の神は正義の神である、とする立場から、そのための論拠を示すことにある。ヨブ記に正義を見出しえなかった近代人のユングとの対比でもって、ヨブ記にたいする賛否両論を際立たせるのが目的である。さらに近代人のユングの説とともに、中世のユダヤ思想家マイモニデスがヨブ記をどのように解釈しているかを併せて考えて、ヨブの試練の意味を問うことにする。ヨブ記には、ヨブへの試練のほかに、なぜ神が人より知性の劣るとされる動物の創造をあのように誇るのか、などの疑念を起こさせるものがある。それにたいしても、マイモニデスは答えようとしている。ヨブ記の神学の問題として、大きくは、ヨブの試練は何のためだったのか、神の顕現とは、また、天地創造の目的は何か、自然の営みの目的は、動物の創造の目的は、といった項目を挙げることができるだろう。

従来の「ヨブ記」概観

従来の一般に理解されているヨブ記は、つぎのとおりである。

「ヨブは対話の中で、神の正義を鋭く問うているにもかかわらず、何の解決も示され

ず、別の人物の若いエリフが登場し、ヨブの苦境の本質についてエリフ自身の見解(observation) を述べる。結局、神がその場に現われて、ヨブを叱責し、子供たち、財産、健康をもとにもどす。」(Job. Chap. 3) (Anchor Bible Dictionary)

「神はヨブに、人間の支配の外に住んでいる生物、ライオン、山羊、野牛、駝鳥、馬、鷹や鷲など、自然の不思議について講釈をする。」(Chap. 39) (ditto)

「ヨブの最初の悔い改めに満足せず、神は、二つの特別の被造物（河馬と巨鯨）を誇る。創造主に挑戦するほどの人間の驕りと弱さを認めたとして、強大な河馬と鯨さえも、神は、楽しんで遊ぶための玩具にしてしまっている。それを見て、ヨブは、力ではとても神にかなうものではない、と悟るのである。」(40 : 3-5)、(chaps 40-41)、(40 : 10-14)、(42 : 1-6)、(ditto)　ヨブ記は散文と詩から成り立っており、その詩の部分が物語の構成を損なっていると評されているのである。つまり「ある意味では、ヨブの詩が物語りを損なっており、詩が終わるまでヨブの運命は宙ぶらりんになったままである。脅威に追い込まれたヨブのエゴは、何とか持ちこたえようともがくのだが、エリフの反論にさらに神の問いかけもあって、こういったことすべてが、以前からあった物語つまり民話を脚色することになった」(ditto) からである。「ヨブは、彼の有徳さにたいしてはともかく、少なくとも苦悩にたいしては償われている。しかし無実の者たちが償われることはなく、今日に至るまで満足のいく調和は見出されていない」(ditto)「長老たちの同意も得ずあえて対話に立ち入り、みずからの怒りが正しいとするエリフの大胆さ…」(ditto)　その他概観したところ、ヨブ記については、詳細な説明はあってもどちらかといえば表面的である。エリフにたいしては、評価は低いといわざるをえない。ヨブ記には、根底においては神を肯定的に慈悲の神として認識できるにもかかわらず、なぜ神はあのように過酷にヨブを試されたのか、海や陸の動物は行動に責任をもたないにもかかわらず、なぜ神はあのように人間より劣るとされる生物の創造を誇るのか、など矛盾に充ちた神の姿が前面に押し出されている。篤信のユダヤ教徒やキリスト教徒にとっては、積年の躓きの石であったにちがいない。そのような法外な幼児的ですらある創造主については、理解し難くても性急に結論を出すべきではない。矛盾する様相の中にこそ深い神慮が存在すると考えられるからである。ヨブの試練も天地創造の目的も人間に益するために意図されたのであると解釈して、ヨブの神は究極的には人間の救済を図る神であるという結論に導きたい。

ヨブ記はハギオグラファ (Hagiographa) と呼ばれる文学 (Writings) であるから経典としては二義的であって重視するには及ばない、というユダヤ人は多い。しかし旧約聖書の中の、そのように正典として認められている文学を軽視してよいものだろうか。律法が中心の、預言者モーゼによる五書トーラーをもっとも重視するのがユダヤ教の主流ではある。とはいえトーラー以外の預言書やヨブ記を含むいわゆる知恵文学といわれ

るものの中にメシア思想が見え隠れしながらも覗われるのであって、タルムードと称する口伝のラビ文献の中にメシア思想があるとしても、部外者である筆者にとっては現在のところ推測の域を出ない。モーセの存在を単なる寓話であるといえないのと同様に、ヨブ記もまた天啓によるものと考えたい．作者がいて繋ぎ合わせて作られた文学であるとされているにもかかわらず、ヨブ記には、理解し難くはあっても、創造主の知識が隠されていると考えたい。従来のヨブ記解釈では、登場人物の一人のエリフ（Elihu）は、どちらかといえば、重要な役割を担っているとは考えられていない。エリフが預言者であるとの言及が今までに無いので、そのため、預言者としてのエリフとその重要性についてとくに述べることにした。中世のユダヤ思想家のマイモニデス（Maimonides）は、エリフが預言者であるとは指摘していないが、エリフの言葉の一部に注目しているので、それについて引用することにした。天地創造の、自然の営みの目的のうち、暦などの自然科学との関係については、今回は述べないことにした。ヨブの試練という論点に絞るべき、と思ったからである。ヨブ記の神学の、もう一つの重要な提起は、メシア思想である。ヨブの横暴な神が、女性性と男性性を具えた両性具有的な柔和な神として、人間と契約更新をする可能性あるいは予言というべきか、それが旧約の預言書には随所に見られるのだが、そのような新しいエルサレムの実現への示唆がヨブ記には見られるのである。忍従という女性性を強要されたヨブも、その一環として理解することもできる。メシア思想については、稿を改めて述べることにする。

ヨブの試練の目的

神はヨブが義人であり忠節であると知りながら、ヨブと３人の長老との議論の場に現れてヨブを非難する。そのためにヨブは、彼自身は正しく何ら咎められるところは無いと信じながらも、弁解を中止せざるを得ない。なぜヨブは、神の彼に対する非難を受け入れ、つぎのようにいったのだろうか。「私は卑しい者でございます。一度は話しましたが二度は話しません。私は口に手を当てます」（Job 40：4-5）と、ヨブは答えるのだが、この答えには正反対の二通りの解釈ができる。ヨブは、神には抵抗しても勝てないとみずからの無力さを自覚して、ほんとは自分は正しいのだが、と思いつつ答えたのかもしれない。あるいは神の叱責は正しく自分は間違っていた、と忽然と悟り上のように答えたのかもしれない。どちらかといえば、釈然としないために、ヨブはこのように答えたのだろう。これがヨブの神への最初の謝罪である。神は、ヨブの内心を見透かして、天地創造の業を示し厳しくヨブに質問する。このような、謝罪はするが内心は疑念をもっているのは、人として自然なものであって咎められるべきものではない。現代人の目には、どの時代の社会であっても、無罪であると主張するヨブの態度は正当であるとされるであろうし、神にたいしても正義を求めるヨブは称賛にすら値するとみなされるだろ

う。それにたいして、もう一つの従順という視点からの解釈も成り立つのではないか。つまりヨブの唯一の誤りは、自己を弁護し抗議を申し立てたことである。これが理由で、神はヨブを非とされたのである。ヨブが自己の正当性を申し立てようがそうでなかろうが、神はヨブがこれまで義人であったことは承知の上であったはずである。

神の顕現としてのエリフ

ラム氏族のブズ人でバラケルの子、エリフ(Elihu, the son of Barachel of the family of Ram) (Job 32 : 2) という名の一人の若者がいる。ヨブと三人の長老たちの議論がもはや尽きて、賢者といわれた老人たちが途方にくれてしまった。そのとき若者のエリフが進み出て、つぎのように語り出す。「今まで黙って聞いていたが聞くに堪えない、神が正義に悖るなどありえないのだ」(Job 34 : 12)、と彼はいう。この時点においてエリフが状況を正しく判断して語っている、と、これまでさほど理解されていないようである。エリフの言葉は、単純で直裁で無謀にすら聞こえるからである。大胆にして生意気なこの若者のエリフが目立たぬ役柄でありながらも預言者であることを、ここで指摘したい。というのは、その理由は、エリフが現れ彼が神の意図を代弁して語った後に、神自身が現れエリフの言葉は正しいと承認されるからである。神にさきがけてエリフも、天地創造について延々と述べているからある。

『ヨブへの答え』

ヨブ記の神をもっとも厳しく批判したのは、スイスの心理学者であり精神医学者であったユング (1875-1861) である。ユングは、『ヨブへの答え』(— Answer to Job —) (原題— Antwort auf Hiob —) (1952) を77才の時に書いている。ユング最晩年の著作である。神についてのユングの結論であると考えてよいだろう。ユングは、ユダヤ人ではなかったが敬虔な家庭に育ち、神とは何かを生涯にわたり求め続けた。物語文学としての形式をもつヨブ記では、ユダヤの神の不条理さが、さまざまな角度から議論されるため、ことさらに際立ってしまう。読む人も議論に引き込まれてしまい、物語としては完結しているヨブ記の正義を秩序立てようとするのだが、ユダヤ教の教説をどのように並べてみても解決からは程遠い。ついにユングは西洋の神を見限って、道教などの東洋思想に方向転換することになってしまう。近代人として知性でもって神をはかることの難しさがここにある。『ヨブへの答え』のなかで、ユングは次のように述べている。

「ヨブ記は、ある神のドラマが発展していく長い道程におかれた道標のひとつである。ヨブ記が成立したとき、ヤーウェの矛盾に満ちた像を、すなわち激情のとどまるところを知らず、しかもわが身のこの無節度に悩む神というイメージを、描き出す証言がすでにいろいろとあった。怒りとねたみが心をくいやぶる、そしてそれを自覚することはく

るしいと、ヤーウェみずから認めている。慈しみと残忍、創造と破壊への意志が並んでいるように、洞察力と洞察の欠如が同時に存在する。あらゆるものがここにあり、どれも他のものを妨げない。このような状態というものは、反省の意識が存在しないか、あるいは反省能力がきわめて脆弱でその能力が偶発性のものである場合としか、われわれには考えられない。このような状態は、無道徳と以外には名づけようがない。」(—Answer to Job— p. 3) ユングの神解釈はここに集約されており、激情の止まるところを知らず正常な人格とはあまりにもかけ離れた、神の姿に困惑したユングがいる。不正には不正をもって報い、徹底的に批判を加えて、神に立ち向かうユングがいる。そうすることによって、何か救済神話が見えてくるのではないか、と一方でユングは希望を捨てきれない。神の、この横暴の性は、女性的な柔和の性によって緩和できるのではないか、それにはマリアの被昇天をもってする、とユングは考える。

ローマの兵士たちの間で広く流布したミトラ教の神は少年神であって、仏教の弥勒信仰のもととなったとされている。ミトラ神は、両性具有であるために、陰陽の均衡を保つことができた。そのような高次な段階の神の創成をユングは想定したものと考えられる。しかし、ユングは、終末を幻視したヨハネの黙示録の混乱と無秩序に再び当惑して、結局、激情を滅却した東洋の神に向かったのだろう。ユングは、光を象徴した曼荼羅図に、深層心理の中で幻視される曼荼羅図に救済を求めた。精神病理学の症例から、集合無意識の元型として集めた曼荼羅図像から、神性を認識しようとした。力関係ではあまりにも微小なヨブは、神の気まぐれと破壊的な怒りに立ち向かえないと嘆きつつも(Job 9 : 2-32)、神の中に仲裁者がいるのではないかと期待している。メシアの予感である。ユングは、ヨブ記の成立年代が紀元前600年から300年であるとされているので、ヨブ記にはギリシャの影響があったと考えていた。ソフィアすなわち神智が、女性の霊として創世以前から神と共存して永遠に存在しているとする観念があって、この女性の霊であるソフィアが母性的メシアとして仲介者になりうるのではないかとユングは考えたかった(Chap. 3)。ユングの存命中に世界各地でマリアの顕現が度重なり、ユングを勇気づけることにはなった。さらにローマ法王は、マリアは花嫁としてキリストと、ソフィアとして神格と、結婚によって結ばれている、という教義を打ち出した。「終末時には太陽の女の幻は実現するだろう。この真理を認め、あきらかに精霊のはたらきによって、ローマ法王は《マリアの被昇天》という教義を告げ、全世界の合理主義者たちを仰天させたのである。つまりマリアは花嫁として子と、ソフィアとして神格と、天の結婚の部屋で結ばれているというのである。」(Chap. 13 p. 96) ユングは、これを「キリストの現身化」(the Incarnation of Christ) (Chap. 17 p. 97) の予告とみた。「子羊の結婚は、受胎告知を繰り返す」(原注 p. 97)ことになるからである。ということは、ユングは、気づいていたのかもしれないし、そうでなかったかもしれないが、ヨハネの黙示録にある世界の

終末があれば、第二のエルサレムに迎え入れられ救済される人々と、救済から洩れて混沌の中に投げ込まれる多くの人々とが分けられることになるだろう。そのような残された人々のために、つぎの一巡の救済史が始まるのでなければならない。時計の文字盤の上を短針が一回転し、一つの終末が過ぎ、また新しい時間が始まるとして、その新たな長い救済の歴史のために、ふたたびマリアからキリストが生まれる必要がある、とでもいうのだろうか。未来佛としての弥勒は、海辺の砂粒の数ほどもある凡夫がすべて救われるためには、56億7千万年もかかる、としたといわれる。ユングはこの告知を、一つにはヨハネの幻の実現として、二つには終末の時の子羊の結婚への引喩(overshadowing of Mary 原注 p. 97) として、さらには、旧約聖書のソフィアへの想起 (anamnesis) であるとして認識している。それとともにユングは、黙示録の反キリストの猛威の中にふたたびヨブの神を見る。救済の実現を望み見るとともに、ふたたび善と悪の絡み合いを見て、混沌の意味を推りかねるのであった。ユダヤ教神秘思想や二元論などを模索しながらも、結局ユングは旧・新約聖書の中に明確には救済を見出すにいたっていなかったといえるのではないか。ヨブの試練の意味を、ヨブの神がどのように正義の神であるかをユングは推りかねたといえるのではないか。

The Guide of the Perplexed (『当惑者のための手引き』)

エリフについてマイモニデスの指摘があるとすでに述べたが、マイモニデスはヨブ記の命題であるところの、試練あるいは悪の存在をどのように考えていたのだろうか。マイモニデスの『当惑者のための手引き』(— The Guide of the Perplexed —) から眺めてみる。『当惑者のための…』と表題がついているのだが、マイモニデスが想定している当惑者とは誰であろうか。マイモニデスが著作で述べている見解は曖昧であると受け取られ、ときに大いに矛盾した論が展開されているために、マイモニデスの著作の読者が当惑するのである。『当惑者のための…』は、そのようなマイモニデスの説に当惑している読者のために書かれたもののようであるが、この著作によって、いっそう当惑感が強められかねないのである。というのは『当惑者のための…』の第一部はイスラム神学によって創世を説明されており、第二部はアリストテレスの哲学を前提として論じられているからである。補足として、マイモニデスについて解説しているハワード・クライセル(Howard Kreisel)による「モーゼス・マイモニデス」('Moses Maimonides' — History of Jewish Philosophy — 1997) から、『当惑者のための…』全般に亘って、概説してみる。善と悪、一元論か二元論か、不当と見える試練は何のためか、など中世のユダヤ教学者がどのようにこれらの問題について考えていたかを知るためのきわめて示唆に富む説だからである。近代というよりむしろ現代の人といえるユングと、時代からいえば対照的な中世の人であるマイモニデスとは、説の違いは著しいと想像するかも知れないが、

マイモニデスはむしろ合理主義者で、近代に近い考え方をしている。しかもその合理主義の淵源は、古代ギリシャのアリストテレスから来ているのである。前述したが、マイモニデスは、ヨブの議論はアリストテレスの意見に即していると評していた。ユダヤ教からは外れていると非難しているのではなくアリストテレスに傾倒していたマイモニデスはヨブを称賛したのだ、と解してもよいだろう。クライセルによると「マイモニデスほどの人は預言者モーゼ以来いまだに現われていないのである、すでにもっとも早い頃から著作に、マイモニデスは、預言書の譬えやラビ文献を深く理解すればそれらが哲学的真理を比喩的に表現したものであるとの認識にいたるということを示そうとした」('Moses Maimonides' p. 248)、とクライセルは伝えている。その他注目すべき内容の指摘は、つぎのようなものである。「マイモニデスは、聖書やラビ文献は哲学的に考察されるべきである、天使についての記述は別類の知性によるもの、天使などは存在しない、と説く。マイモニデスは、神の統治を超自然な働きとする説には全面的に反論した。超自然などとは、彼にとっては無知の極みであった。神の叡知と力はまさに秩序ある自然の働きによって示されるのである。」(2. 6)、(p. 256)「マイモニデスの預言に関する見解は、プラトンの創造についての見解にしたがっている。」(p. 268)マイモニデスは、ビルダドの説は古代のムタジラ派神学の見解に従っていると評していたが、そのムタジラ派の見解についてつぎのように説明している。「人間の自由は限られたものである。神の正義の、褒賞と罰は、人の行いに応じている。幼い者が虚弱であったり、義人の死などは、神の叡知のしからしむところである。こういったことは、彼らが来世で受ける褒賞をいや増すために起こるのである。動物すらも、その苦しみにたいして来世で償いを受ける。」(p. 270) 中世ユダヤ神秘思想家のマイモニデス (Moses Maimonides 1135?-1204) が『当惑者のために手引き』の中でヨブ記について述べている解釈の要点は、つぎのようなものである。ヨブ記は「もしこのような話が現実にあったとすればと仮定して、人々が論議するための譬え話ではないか」と示唆されているのである。(III Chap. 24 p. 494 50 a)「ヨブの意見だということになってはいるが、ヨブの意見はアリストテレスの意見に即している。エリファズ (Eluphaz) の意見はユダヤの律法の精神に沿っており、ビルダドはムタジラ (the Mutazila) の教義に、ゾファル (Zophar) はアシャリア (the Ashariyya) の教義に、つまりビルダドとゾファルは、古代の神観念による摂理に従った意見である。」(ditto 50a p. 494)「このときエリフという別の者が割り込んで意見を述べる。彼は長上の者であったらしく、年齢はもっとも若年であったが知識ではもっとも完全であった」(ditto 50b p. 494-495)、と書かれているのである。マイモニデスはまた、ヨブと三人の長老たちの意見を、耄碌のたわ言、と述べ、エリフは謎めいた発言をすると指摘しながらも、エリフの意見は、エリファズ、ビルダドやゾファルの意見に何ら新しいことを付け加えていない、というのである。「エリフは最年少でありながら、地位などはヨ

ブと三人の友人たちよりさらに上位の長老格であった、というのは異写本ではそのように書いてある、エリフはヨブたちを叱りつけるばかりで、とくに彼らと違った意見を述べているわけではない」(dittto 50b p. 494-495)、「エリフが付け加えた概念は不可解さ(enigma) に充ちており、これこそ物語の作者の意図するところである」(ditto 50b p. 495)、とマイモニデスはいうのだから、エリフについてのマイモニデスの意見には、当惑のほかはない。しかしそれでもなお、マイモニデスは的確にエリフを判断していると言わざるをえない。「他の人たちは言わなかったが、エリフだけが譬え話しとして(parabolically)述べた概念があって、それは天使の介在についてである。人が病に臥し死に臨んだと思われるとき天使が仲介すると、どんな天使であれその天使は受け入れられて人は快癒する、という意見である。また、見よ、これらすべては神がなされるのである、二度、三度と、神はなされるのである、とエリフはいう。このような概念は、エリフだけが述べており、彼はまた、このように述べるに先立って、預言はどのように授かるかについて言明しているのである。人が深い眠りに落ちるとき、夢の中で、夜の幻の中で、神は一度ならず二度も話かけてこられるが人は気づかない」(ditto 50b p. 495)というのである。天使の介在について指摘したのはエリフだけである、天使の介在によって危機を逃れているのを人は気づかない、とエリフはいう、とマイモニデスは指摘しているのである。神の恩寵が存在する、とエリフは告げていることになる。ヨブの神は、荒ぶるさなかにあってなおエリフの言葉をとおして、神がひそか預言を与えているのを人は気づかぬ、と語っているのである。神は夢やしるし(sign)によって人に告げ知らせ人の救済をはかっている、とエリフは伝えている、とマイモニデスは指摘しているのである。旧約聖書の中で、神が姿をとって現われるのは、アダムとエヴァやモーセにたいしてなど、またヨブにたいするように、それほど数多くはないと思われるかもしれないが、姿や声による以外にも神の顕現がある、とエリフは伝えているのである。夢やしるしによって直接個人に伝えたり、あるいは預言者をとおして間接に神は人への伝達をはかっているのを、ヨブ記は明らかに告げていることになる。ユダヤ教徒にとっては、掟や律法の遵守は神学理論の理解にまさって重要であるとされている。とはいうものの掟や律法にまさって重要なものがあるかもしれないのである。イエスが伝えた言葉のなかに、「すべての罪は許されるが絶対に許されない罪がある、それは聖霊にたいする罪である」(マタイ 12:31)、というのがある。では聖霊にたいする罪とは何か。具体的には、預言者の言葉を侮ってはいけない、ということではないだろうか。預言者やしるしによって神の顕現がある、とヨブ記は伝えているのであるが、預言者は、どちらかといえばモーセ以外は軽んぜられがちである。イエス自身も預言者でありながら軽んぜられたのだが、そうした聖霊の働きを拒否したり妨げたりしては絶対にいけない、とイエスは告げていることになる。ヨブ記からも、聖霊や天使による介在としての夢やしるしがありうること

になる。では天の啓示としてのしるしとは何か。具体的に日常的に示されるのは、自然の現象と動物の創造であるといえるだろう。

天地創造の目的——自然と動物——

獣類などの生物の創造は何のためだったのか。なぜ神は、つぎのようにいって、ヨブに挑戦したのだろうか。「腰（生殖力の生じる場として衣服をまとう腰の部分）をしっかり締めて、男らしく立ち向かえ」(Job 40:7-8)、とは、しっかり考えて答えよ、この問いには重要な意味があるのだ、といったところだろう。神はヨブに、おまえは、私の判断は間違っているというのか、私を非難するのか、自分が正しいと思うのか、と対等の対抗者であるかのごとくに迫るのである。マイモニデスは、前述の引用文に続けて、つぎのように書いている。「神は、一度いや二度は、語られるのである。それでも人は気づかぬ。…それだから、この方法を確かなものにするために、雷鳴や稲妻、雨、風が吹くことなどの、多くの自然現象でもって人に知らせるのである、といって、エリフは、この伝達方法を動物の状態などの多くの問題と結び付けるのである」(— The Guide of the Perplexed — III 25 50b p. 495) 神の意思を人に伝達する媒体として、しるしとして自然や動物がある、とエリフが指摘したと述べられているのである。マイモニデスによると「エリフはヨブにつぎのようにいう。神はあなたに語りたいのだ。神は口を開いてあなたの非を語りたいのだ。神は知恵の秘密をあなたに語りたいのだ。それら（自然や動物）によって、あなたに二重に教えたいからだ、あなたは、探索したからといって神を見出せるというのか。あなたは全能者を完全に見出せるというのか。」(Job 11:5-7) 注目すべきことに、神はヨブの誤りを、口を開いて指摘するばかりではなく叡智の秘密も教えて二重に諭すのだ、とエリフがいっているのである。まだ神が現われるまえに、すでにエリフは、神がこれから語る内容を先取りして知らせていることになる。脚註(— The Guide of the Perplexed — III 25 p. 494) によると、この引用文にはマイモニデスが省略している文があって、「神は罪の軽減をなさる」とすら書かれているのである。恩寵を告げ知らせているばかりではなく、神が自然や動物の創造を誇って激しくヨブに質問しているかに見えて、その創造は人間のためにしるし(sign)を与えるのが目的である、とエリフがすでに伝えていることになる。雷、雷光、雨、吹く風、また動物の状態などは、しるしとして神の意思を人間に伝えるためにあるのだ、ということになる。動物の創造は何のために、と神はヨブに激しく問いかけているのだが、ヨブは考えもつかなくて平伏してしまった。自然の営みは何のために、と神は問いかけているが、自然の営みは季節や時間の創造、星辰の運行に基づく暦の知識、などなど叡智に満ちており、これこそ人間が限りなく神に近づくために与えられたところの善悪を知る樹の果実ではないだろうか。

自由意志

ヨブ記には、神学としてさらに重要な提起がある。一つには、自由意志とは何か、善と悪とは何か、この現世は一元論に基づくのか、それとも二元論によるのか、などである。正義とは何か、正義は輪廻や因果応報の法則によるのでなければ実現し得ないなど、この主題についても述べたい。同時に、考慮されなければならないのは、不従順とは何か、についてである。アダムとイヴは、神の命令に従わなかった。神は、彼らの不従順について予知しておられたはずである。人は従順ではなく、不従順は、人の本性である。するな、といわれれば、人はする、のである。神話や物語のなかの悲劇の大半は、そのために起こっている。しかし、悲劇を克服して、人は魂の高い次元に到達するのである。このような本性はまた、神から与えられたのであり、人が神に近づくためには不可欠である。アダムとイヴの場合は、未知なるものへ探究心、でもあった。たとえ苦しみのために死ぬのであっても、善悪を知り、崇高とは何か、を認識するのであれば、人は満足するのである。

従順と不従順は、人間精神の発達のためには、どちらも切り離しがたく不可欠である。神は両義的である、といえるだろう。高い知性は、つねに両義的である。高貴な人格は、男性的なものと女性的なものとを併せ持つ、と考えるべきであって、その点からも、ヨブ記の教訓は、ヨブが、いわば神の花嫁であるかのように、従順という女性としての特質を持つよう試され訓練を受けた、と解釈できるかもしれない。ヨブ記は、ある意味では、花嫁としてのエルサレム、の準備段階の啓示であると受け取ってもよいのではないだろうか。

善悪の問題として、神は善であり同時に悪でありうるのか、この問いには、然り、と答えるほかはない。私たちが、神を見たい、と望むなら、人間を見ればよいのである。なぜかといえば、神はご自分の似姿として人を造られたからである。神霊を吹き込まれた人間の中に、善と悪、正義と不正義が、並存するからである。人間がそうであるのと同じように、神もまた、想像もつかぬほどの純度の高い善でもありうるし、論理として、その正反対の悪にもなりうるのである。暴虐の限りを尽くせる神、ヨブの神が存在する、という認識をヨブと共有することになる。では、なぜ、そのような神の摂理の目的は何か、という問いにたいしては、人間に自由意志を与えるためであると答えるほかはない。

神と人間は連動していると考えざるをえない。神と人間は、互いに自己の鏡として向き合っているのである。善と悪は、二元的な別種のものではなく、下から上へ連続した相 (phase) の上に、一元的に存在するものと考えられる。人は、限りなく高い善を志向することによって、限りなく高い神に近づくことができるという希望もまた、この自由意志の付与の中に含まれていることになる。善は、無償の愛、自己放棄、などという言

葉と置き換えられるだろう。人は、神になりたい、という願いすら叶えられる可能性を与えられたことになる。ヨブの神のもつ二面性としてとらえたい。ヨブを試みて手を下した力も神の属性であり、神とその者は二者ではなく一者である、と解釈したい。つまり一元論が現世を支配していると考えたい。破壊と創造は、切り離しがたく一枚の紙の裏と表のようなものである。神は、いかようにも仮借なきものとなりうるが、究極的には正義が貫かれているものと考えたい。そのためには終末のときの復活の思想以前に、中間に試行錯誤を繰り返す輪廻転生の概念が導入されねばならない。輪廻思想について真正面から論じたユダヤ学の文献はあまり見当たらないけれども無いとはいえない。輪廻は存在すると秘かには信じられており、また輪廻の原理をもってしなければ、正義の理念は説明できない。神に不可能はないのだから、他のすべての宗教が当然の教義とする輪廻の原理が働いていないとはい言い切れない。正義の概念、原因と結果の法則、因果応報論（Law of cause and effect）は、輪廻転生によらなければ成立し難いのである。ヨブの失われた最初の子供たちがふたたびヨブのもとに生まれ帰ってきた、そのためにヨブの寿命も延長されたと古代インドをはじめ周辺の東洋の宗教なら、そのように考えて納得するだろう。ホロコーストによって失われた無辜の人々の生命についても、そのように考えれば納得できるのではないだろうか。

輪廻転生は、概してユダヤの人々には、次のように考えられている。「もうひとつの解決方法があって、カバラ論者たちが特に好むところであるが、魂の前世の出来事を解釈しようとすることである。魂は一つの身体から別の身体へ移っていくことができる、と大方のユダヤの神秘家に信じられているのである。ひとりの個人の不当な苦しみはその魂の前世の生活習慣あるいは生きざまの戸口に置かれていると考えられ、今生の幸せと来世のとの関係については、某ラビ・ヤコブ（Avot 4:2）によって明確に分類してまとめられている。たとえば正義の人のためには、来世で神によるにきわめて物質的な報酬として、海の怪物の巨鯨の美味な肉を振舞われる大宴会が取って置かれているというのである。」（'The After Life' — The Jewish Folklore and Legend — p. 32）現世の人々の境遇にたいして、正義あるいは公正観念を引き出すには、引用文にもあるように、はっきりと(pithily)、輪廻転生による勧善懲悪思想が適用されているのである。前世の魂の状態が今生の境遇を決めるという見解はカバラ思想家たちの好むところであった、と述べられているのである。さらに興味深いのは、正義の人が受ける報酬として、神は饗宴を用意し巨鯨(Leviathan)の肉を振る舞ってくれる、というのである。動物は何のために創造されたのかという問いと関わっているとおもわれる。現代でもユダヤの人々は火葬を禁じているが、これなども復活のときの肉体の再生のための素材を取っておくためでもあろう。

結論

ヨブ記は、散文と詩文とで書かれており、ある作者が意図をもって構成した物語文学である。作者がソロモンに帰されている雅歌などとも違って、作者は不祥のままである。エレミヤやイザヤなどによる預言書とも範疇のことなる一書である。散文と詩文では調子がことなる、またヨブと三人の長老との論争が、ヨブが三回、長老のうち二人は三回、残る一人は二回である、構成が整わぬ、物語の冒頭の神の賭けは結局どうなったのか、なぜヨブが唐突にも以前を凌ぐ状態に復帰したのか、失われた子供たちはどうなったのか、など、統一がない、あとからの挿入もあるだろう、と評されて、欠陥が指摘されることの多い書である。そのような錯綜と複雑さは、かならずしも欠陥とはいえない。単純化され矛盾を削ぎ落とした、奉納のための古代の宗教文学のほうが不自然である。人間の生の様相が矛盾に満ちており解釈に苦しむのが実態である以上、ヨブ記のほうが自然であり、近代に発達した物語文学に近いといえるだろう。カフカその他、近・現代のユダヤ人による苦悩する実存主義文学の、ある意味でのさきがけともいえる。ヨブ記では、神とは何か、試練とは何か、など、宗教のもっとも根本的な命題が問われており、この問題の複雑さは、不備と見える構成によって、はじめて表現できるのではないか。不備だと評して、それで解釈を終えてしまうのでは、ヨブ記の本質を見落としてしまうだろう。ヨブ記は議論を引き起こすために作られた譬え話である、といったマイモニデスの批評がもっとも合理的で深慮であるとさえ思われる。欠陥と思われる構成が、じつは内容上不可欠であるかもしれないのである。散文と詩文が混在するのは、サンスクリット語で書かれたものなど、古代文学の常套手法であった。ヨブと長老との論争の回数が中途半端で終わっているのは、エリフの発言が長老の議論を中断させ、あまりに唐突で礼儀に反するものであったことを示していると思えるからである。またヨブの最初の子供たちをふくめて、ヨブ記の辻褄の合わなさは、一つには輪廻の思想を退けた宗教にあっては正義は存在しないという理由によると考えたい。神による賭けは、善と悪を考えるにあたって、一元論か二元論について、自由意志について、救済とは何かについて、考えずに済まされない。サタンは神の子であって、神の許可のもとに人に試練を与える存在であるから、また試練は人を強くするための手段であるから、二元論を想定する余地などはない。人は善にも悪にも幅広く選択して行動することができるよう、神といえども人の意思を容易に覆せないほどの自由が、人には与えられていると解したい。そのため、人の意思を善に向かわせるのは試練による、と解したい。何を自由に選択しても、その結果は因果応報であり褒賞も用意されているのであれば、来世にも亘ってという長い時間のスパンが想定されなければならない。ヨブ記には、問題提起とともに、解答もまた示されている。自然の営みや動物の姿は人に神意を知らせるための配慮である、と

神は、質問の形式を取りながら、諄々とヨブを諭しているのである。その語りかけの激しさは、神の熱意の表れであろう。ヨブ記でもっとも特筆すべきことは、エリフについてである。エリフは神の顕現に先立って神の意図を伝えているからである。自然の現象という象徴言語でもって、また夢や幻という媒体でもって神が人に密かに伝えている情報や神の慈悲に人が気づかぬ、とエリフはいっているのである。エリフは預言者であるとの認識は、ヨブ記解釈に欠かすことはできない。

使用テキスト

* TANACH (The Stone Edition of) (Mesorah Publications) (1996)
*—Answer to Job— by Carl. G. Jung (original title:—Antwort auf Hiob— 1952) Translated by R. F. C. Hull (Prinston Univ. Press: Bollingen Series XX 1972)
* Moses Maimonides;—The Guide of the Perplexed— Vol. 1 & 2 Translated and with an Introduction and Notes by Shlomo Pines and Introductory Essays by Leo Strauss (The University of Chicago Press, 1963) 聖書は、ヘブライ語からのラビ訳によるタナハを使った。原典に近いものに依拠するべきと思ったからである。

参考文献

*—Maimonides' Ethics; The Encounter of Philosophic and Religious Morality— by Raymond L. Weiss (The University of Chicago Press, 1991)
*—Jewish Folklore and Legend— by David Goldstein (Hamlyn: London・New York・Sydney・Tronto 1980)
*—The Encyclopedia of Judaism— (Macmillan)
*—The Anchor Bible Dictionary— (Doubleday)
*—The Oxford Dictionary of the Jewish Religion— (1997)
*—History of Jewish Philosophy— ed by D. H. Frank and O. Leaman (Routledge History of World Philosophy 1997).